

‘ローテク’産業におけるイノベーションと開発： 観光振興によるキャパシティ・ビルディング

岡本 由美子

概要

本論文は、伝統的かつ土着の‘ローテク’産業が観光産業の振興と相俟ってミャンマーの中央乾燥貧困地帯に位置するバガンという地域の発展に寄与するかどうか、明らかにすることを目的に執筆された。ここでは特に漆器産業を取り上げ、セクターイノベーション・システム論のフレームワークを用いながら、産業の発展メカニズムと同地域発展への寄与度に関して実証的考察を行った。情報収集のため、2013年3月から2014年3月の間に3回、バガンで現地調査を行った。

その結果、主に次の3点が明らかとなった。まず第1点目は、観光振興はそれ自体新たな付加価値を生み出すだけでなく、バガン漆器産業に様々なイノベーションが創出される契機をつくり出した。漆器生産者が直接外国のユーザーに接する機会が与えられることによって諸外国の市場の動向が入手できるようになっただけでなく、デザイン、製品開発、材料調達、生産から、販売やマーケティングという一連のバリュー・チェーンの流れを統括できるようになったからである。第2点目は、伝統的ないわゆる‘ローテク’産業に分類される産業においても、組織面でのイノベーション、ニッチな市場の構築、品質の向上等によって様々なイノベーションが創出され、産業がダイナミックに発展していくことが可能な事である。研究開発投資を通じた技術革新のみがイノベーションの源泉ではない。第3点目は、システム・イノベーション論は国際開発研究においても極めて有用な分析フ

レームワークと成り得ることである。同アプローチを適用することにより途上国の産業ダイナミクスの理解についても容易となり、かつ、グローバル化時代における新しい産業政策のあり方について有益な政策的含意が得られるからである。

1. はじめに

‘ローテク’産業はイノベーションとは無縁だと考えられる傾向にあるが、そんな考え方に修正を求める動きが出てきた (Iizuka 2009)。最近の先進国を対象とした多くの事例によって‘ローテク’産業でも非常に多くのイノベーションが創出されてきているからである (Hirsch-Kreinsen 2008, Mendonça 2009, Tunzelmann and Acha 2005、等々)。本論文は、同様なことが途上国においてもあてはまるのかどうか、つまり、伝統的ないわゆる‘ローテク’産業においてイノベーション創出能力が途上国でも構築できているのか、事例研究を通して考察することを目的とする。

本論文はミャンマーの漆器産業に焦点をあてる。まずミャンマーを中心に研究を進める理由は、アジア地域が21世紀、世界の成長センターとして中心的役割を果たすことが予想されている中 (Maddison 2008)、同国は依然世界の最貧国の1つに数えられ、まだまだ今後、適切な開発政策の遂行が求められているからである。

また、漆器産業を取り上げる理由は、ミャンマー政府自体には現在適切な産業政策を通じて

* 本論文は、平成26年10月31日にエチオピアで開催された第12回 GLOBELICS' 14 国際年次大会で発表された英語論文に加筆修正を加えて作成されたものである。

育成していこうとする意向は全く見られないが¹、少なくともバガンといったような地域では2011年以降、漆器産業が地場産業として興隆しつつあり、同地域の発展に大いに貢献しているからである。漆器産業のような伝統的かつ‘ローテク’と見なされている産業において数々のイノベーションが生み出され進化しているのであれば、今後の途上国の産業政策の在り方について有益な政策的含意が得られると考えられる。

本論文の構成は以下の通りである。まず、第2節では、特に途上国を念頭に置きながら、イノベーション・システム論の最近の動向、及び、同論における‘ローテク’産業の位置付けについてまとめる。第3節では、伝統的な漆器産業を取り上げながら、ミャンマーを始めとする途上国にとっての‘ローテク’産業の有用性をどのように考察するのか、その方法論について述べる。第4節は事例研究の結果を分析し、第5節でまとめを行う。

2. 理論的フレームワーク

2.1 イノベーション・システム論

2.1.1 概説

これまでの研究成果により、イノベーションが一国の経済発展に大きな役割を果たすであろうことに関しては異論がない。次に重要なのは、どのように、どのような方法で、イノベーションが実際生じるのであろうか、ということである。これこそ、近年のイノベーション研究の中心課題である。

1980年代後半、主流派経済学の中で内生的成長理論が勃興する丁度その頃、ヨーロッパではイノベーション・システム論が盛んに議論されるようになった。同論は、イノベーション・プロセスは、個々の企業行動のみならず、それを取り巻く組織的、制度的、地理的、歴史的な環境によって大きく左右されるとする(Edquist 2005)。当初、イノベーション・プロセスはそ

れぞれの国家の特徴に大きく左右するとする、国家イノベーション・システム論が盛んであった。しかし、1990年代中盤以降、経済のグローバル化の影響で国家の役割について再考する動きが強くなり、イノベーションの主体は地域にあるとする地域イノベーション・システム論もまた勃興することになった。

それと同時に、経済のグローバル化によって企業活動がいち企業内においても益々多国籍化する中、国家であろうと地域であろうと、イノベーション・プロセスをある一定の地理的区分を設けて説明することは益々困難になってきていると主張するイノベーション・システム論者も登場するようになった。セクターシステム・イノベーション論者である。彼らによれば、イノベーション・プロセスは地理的区分よりも、セクター間によって大きく異なると主張する(Malerba 2002; Malerba 2005; Malerba, ed. 2004)。

Carlsson (2006) は、各国、または、地域のイノベーション・システムは、企業、技術、産業のグローバル化が急速に進行しているにも関わらず、依然として大きく異なっている、つまり、イノベーション・プロセスにおいてそれぞれの国や地域の特徴は失われていないと結論付けた。一方、Archibugi, et al. (1999) は、経済のグローバル化によって、国であろうと地域であろうと、イノベーション・プロセスにおいて地理的境界はあまり意味を持たなくなっていると結論付けている。イノベーション・プロセスにおける地理的境界がもつ意味合いについては、現在、統一見解は得られていない。

2.1.2 開発経済学におけるイノベーション・システム論の位置付け

21世紀に入り、途上国の開発に関する研究においても極めてイノベーション・システム論が注目を浴びるようになった。Lundvall, et al. (2009:2) は、「ヌルクセ、ミュルダール、ハーシュマン、シンガー、センに代表される第一世代開発経済学者の残した偉大な功績は、その後、経済学の主流となっていくた新古典派経済学や内生的成長理論者に受け継がれることはなかっ

¹ 漆器産業は現在ミャンマー政府の協同組合省家内工業局の管轄下にある。残念ながら、同局は毎年の政府予算が少ない。

た」とする。イノベーション・システム論はまさにその間隙を埋めるものとして、徐々に国際開発研究の中で受け入れられるようになってきたのである。

イノベーション・システム論には、1980年代台頭してきた当初から、2つの異なる大きな流れがあった (Lundvall, et al. 2009)。狭義の意味でのイノベーション・システム論は、科学技術との関連で主にイノベーションを捉え、ある国、地域、またはセクターのパフォーマンスはどれだけ研究開発投資を推進できたかに拠るものとする。一方、広義の意味でのイノベーション・システム論は、科学技術のみならず、それぞれの国や地域の持つ制度、マクロ経済状況、金融の在り方、教育やコミュニケーションのためのインフラ構築や市場状況もまたイノベーション創出のための重要な要件としてとらえ、かつ、それら要件が国や地域の個人、企業、団体の継続的学習やキャパシティ・ビルディング構築にどれだけ貢献できるのかが重要である、との立場をとる。

狭義のイノベーション・システム論は途上国の様々な問題・課題解決にあまり有用な分析的枠組みであるとは言い難いが、広義のそれは逆に近年益々、途上国の問題解決に有益な考え方として注目を集めるようになってきた。1990年代以降、センのケイパビリティこそ開発の目標とすべきとする考え方 (Sen 1999) が開発経済学でも開発政策立案者の中でも広く受け入れられるようになった。継続的学習とコア・コンピテンスの確立こそセンの主張するケイパビリティ構築の源泉であるが、まさにそれこそが広義の意味でのイノベーション・システム論の真髄を成すものである (Lundvall, et al. 2009)。

2.2 ‘ローテク’産業におけるイノベーションとは何か？

システム・イノベーション論の中でもセクターイノベーション・システム論がここ10年の間に、途上国の産業発展メカニズムを研究する分析的枠組みとして用いられるようになってきたが、それは、ある産業でのイノベーションの勃興と社会への浸透がまさに途上国の経済発展に不可欠との認識が高まってきたためである (Malerba and Mani 2009; Malerba and Nelson

2011)。その中でも Iizuka (2009) は、途上国であるチリの例を引き合いに出しながら、伝統的かつ‘ローテク’産業に分類されるサケ産業は近代的科学技術の知見を自ら創出したりすることがないという意味で‘ローテク’産業ではあるが、様々な知識が集約された産業であり、かつ、外部からの新しい知識と内部の既存の知識を新しく結合させることで様々なイノベーション創出に成功してきたことを実証的に明らかにした。

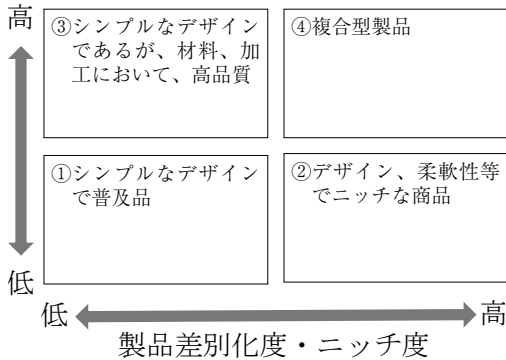
Tunzelmann and Acha (2005) は、イノベーション・プロセスの中で踏まなければならない段階において、‘ハイテク’産業と‘ローテク’産業の差はそれほど多くはなく、両者に違いがあるとすれば、前者がイノベーション創出の源泉として近代的な科学技術に重点を置くのに対し、後者はそれよりは製品の差別化やマーケティングに重点を置く傾向にあるとする。言い換えれば、‘ローテク’産業では、「少なくとも企業レベルでは、最先端科学技術を習得し次なるイノベーション創出の機会を狙うということはない。それよりも、企業内で試行錯誤を繰り返しながら実践や経験を通して学習を積み上げて行き、イノベーションを創出する傾向にある」 (Tunzelmann and Acha 2005: 417)。

Pérez (2006) や Iizuka (2009) は、この‘ローテク’産業のイノベーションの考え方がとりわけ途上国の産業政策を振興する上で示唆に富むとする。なぜならば、短期的に途上国が近代的な科学技術力を構築することは不可能であるからである。両研究者とも、近代的な科学技術の重要性は否定しないものの、短期的には、グローバル経済において市場のニーズを徹底的に研究してニッチな市場を構築することで途上国の国際競争力を高めることを推奨している。

事実、企業は製品差別化によって新しい市場を構築できる。第1図が示すように、一般的には、ある1つの製品群であっても4種類の異なる市場があると考えられる。第1番目の市場は、低コスト、かつ、スタンダードな品質を有する製品群である。第2番目の市場は、スタンダードな品質ではあってもデザインや機能等で差別化を設けるニッチ市場である。第3番目は、デザインや機能は極めてシンプルであっても、生産プロセス等の品質向上で高付加価値を生み出すことができる製品の市場である。第4市場は、

デザインや機能、及び、品質において極めて高い水準を擁する製品群である。

品質の度合い



第1図 一般的な市場のセグメンテーション

資料：Iizuka (2009) を基に、筆者作成

Iizuka (2009) は、途上国の伝統的かつ‘ローテク’産業であっても、着実にステップアップしていけば、産業の高度化や高付加価値化を達成できることを実証的に明らかにした。「ただ単に科学技術力の向上というだけでなく、ニッチな市場の構築を通して無理なく産業の高度化を図ることができるという事実は、技術力がないが多くの資源を有する途上国の今後にとっては非常に有意義な結果である」(Iizuka 2009: 235)。

2.3 グローバル化時代における新しい産業政策の模索

しかしながら、グローバル社会の中であって、どうやって途上国がニッチな市場を見出すことができるのであろうか。一時、先進国においても、途上国においても、産業政策という言葉を使用することがタブー視されていた時期があった (Cimoli, et al. 2009)。新古典派経済学の流れを汲む著名な経済学者やその信奉者が占める国際通貨基金や世界銀行が‘ワシントン・コンセンサス’と呼ばれる市場万能主義的な経済政策を途上国に対しても指導していたからである。しかしながら、あまりにも行きすぎた経済自由化政策は途上国で思ったような成果を挙げられず、同処方箋は信頼を失った (Cimoli, et al.

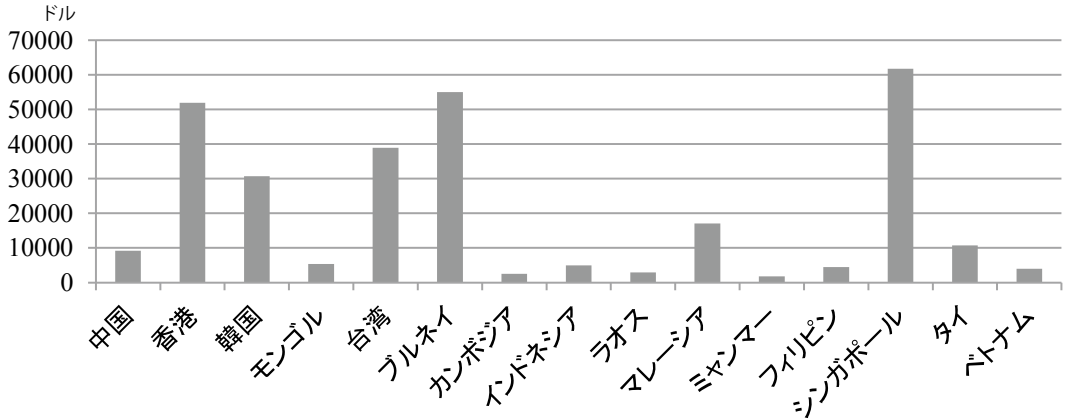
2009)。

1980年代、新古典派経済学に依拠する経済政策に対抗し、かつ、同経済学内ではうまく説明できないイノベーションが社会の中でどのように生じるのかを概念化したイノベーション・システム論が台頭してきた (Chaminade, et al. 2009)。同理論は、「関係する人や組織がお互いどのような影響を与えながら学び、イノベーションを創出していくのか、そのプロセスを分析する1つの手段である。資源の配分や登場する人や企業の合理性を前提とするが故にイノベーションという現象をうまく説明できない新古典派経済理論とは異なる」(Lundvall, et al. 2009: 6-7)。つまり、イノベーション・システム論は国や地域やセクターのダイナミックで力強いパフォーマンスを創出するために必要な制度や政策体系を提示するものである。これこそ、まさに、新しい時代に適合した産業政策構築のための理論的支柱ともいえるであろう (Soete, et al. 2009)。

3. 方法論

3.1 立地の選択

ミャンマーを対象に研究することは大いに意義があると考えられる。第2図が示す通り、ミャンマーは戦後、1人当たり国内総生産 (Gross Domestic Product: GDP) において東・東南アジアの中で最貧国に陥ってしまった国であり、今後の開発課題が非常に大きい国の1つである。しかし、2011年3月、民政移管が断行され、ミャンマーでもようやくグローバル経済への統合プロセスが始まった。その結果、2014年度から2015年度にかけて約8パーセントという高度経済成長が期待されるようになった (Asian Development Bank 2014)。漆器産業というミャンマーの伝統的かつ‘ローテク’産業が国又はあるいち地域の持続的成長に貢献できるのかどうか、非常に興味深いところである。



第2図 2012年の東・東南アジアにおける1人当たり購買力平価GDP

資料：Asian Development Bank (2013) を基に筆者作成

主な調査対象としてバガンという古都を選んだのは、ミャンマーで最も古くから存在し、かつ、漆器産業の一大生産地であるからである (Fraser-Lu 1985)。さらに、第3図が示すように、バガンはミャンマーの中央乾燥平原に位置するため毎年雨量が少なく、この町、及び、その近郊の村の生活はミャンマーの中でも最も過酷であり、貧しい。成長の成果が広く国民に還元される包括的成長の達成は、2000年9月国連ミレニアム・サミットで採択されたミレニアム開発目標の1つであるが、漆器産業という、伝統的かつ‘ローテク’産業がミャンマーでも最も貧困地帯とされる地域で包括的な成長に貢献できるかどうか、試されているところである。



第3図 ミャンマーにおけるバガンの位置

出所) : http://ds-lands.com/data_images/countries/myanmar/myanmar-10.jpg

3.2 漆器産業とセクターイノベーション・システム論

Tunzelmann and Acha (2005) は‘ローテク’産業の競争力の源泉は3つ、コスト、製品の差別化度、及び、相互補完的資産形成を挙げている。ミャンマーの漆器産業がどの程度、世界において国際競争力を保持しているのか、また、どのようにその競争力をつけるに至ったのかについて、セクターシステム・イノベーション論を駆使しながら、分析を加える。イノベーション・システム論の中でもセクターイノベーション・システム論を使用する理由は、同フレームワークはある産業の進化のプロセスを説明する能力を最も有しているため、本研究に適していると考えられるからである (Malerba 2002; Malerba 2005; Malerba, ed. 2004)。

セクターイノベーション・システム論は大きく言って4つのブロックからなる。知識・技術的基礎、主要アクターの特定化とそのアクター間におけるネットワークの構築、制度構築、及び、需要の役割である。本論文は主に2011年の民主化以降の漆器産業の発展メカニズムについて、漆器産業のアクターがそれぞれ、また、お互いにどのような学習をし、どのような知識を蓄積し、イノベーションを創出したのかについて分析を加える。

3.3 データ収集方法

ミャンマー、とりわけ、バガン地域における漆器産業の歴史は長いにも関わらず、同産業について書かれた資料は極めて限られている²。

さらに、漆器産業の産業構造について書かれた書物は皆無である。したがって、ミャンマーにおいて同産業についての情報を収集するために、2013年3月10日から3月16日、2013年12月27日から2014年1月2日、及び、2014年3月10日から3月18日にかけて、合計3回の現地調査を行った。

まずは、バガンにある主な漆器屋（製造販売店）を訪問し、その経営者にインタビュー調査を行った。主な質問内容³は、(1) 設立年、(2) 雇用者数、(3) 製品差別化の有無とその手段、(4) コスト優位性の有無とその手段、(5) 産業の知識基盤、(6) ネットワークの構築度合い、(7) 学校等の制度の重要性、(8) 外国人観光客の役割、についてである。また、それら製造販売店については、JETRO (1999)、松島 (2009)、及び、バガンの漆器の生産、及び、販売に関するホームページを参考にした。さらに、ヤンゴンにある漆器販売店も訪問をし、ミャンマー全体に関する漆器産業の情報を収集した。

なお、バガンで情報収集にあたった主な漆器屋（製造販売店）は次の通りである。The Royal Golden Tortoise、U Ba Nyein、Tun Handicraft、Sin Phyu Taw、Golden Bagan、Art Gallery of Bagan、Golden Cuckoo、Shwe La Yaung、Chan Thar Thu、Bagan House、Myat Mon、The Lotus Collection、Mya Thit Sar、Family、Diamond Arrow、King of Golden Elephant、Myo Myo、Win Thiri、及び、Ever Standである。ヤンゴンで訪問をした漆器販売店⁴は、Myanmar Lacquerware Shop、及び、ポージョーアウンサウン・マーケット内にあるBagan Gift CentreとLa Pyet Wunである。

4. ミャンマーの漆器産業に関する実証的考察

4.1 ミャンマー漆器産業の略史

中国や日本では数千年も前から漆が使用されてきているほど、アジアの文化や歴史の中では切っても切れないものである。伝統的漆の技術は中国と交易のあった国へ広がり、さらに、その他のアジア諸国にも広く伝わるようになった。これら技術は長い歴史の中で進化したものであるが、その中でも漆を使用した器や家具類はその後、世界の各地で一大産業を形成するまでに発展していくのであった (Kopplin 2002)。

ミャンマーの文化の中で同国が誇る伝統工芸品や美術品⁵が10ほどある。しかしその中でも漆ほど、Sylvia Fraser-Lu⁶や松島⁷といった世界的に著名な漆芸専門家の注目を集めた伝統工芸は他にはない。その理由は、ミャンマーの漆器は漆器といえれば世界的に有名な日本や中国のものとは異なる技法やデザインで製作されたものだからである。つまり、ミャンマーは独自の漆器技術・文化を保持しているのである。

Htaik (2002) によれば、ミャンマーの漆器職人はバガン王朝の時代 (1044年から1287年まで) から代々その技術を後世に伝授し、今日まで至っている。地理的に言えば、漆器づくりは11世紀、初めてミャンマー統一を成し遂げたバガン王朝の時代から始まり、それが同国の他の地域へ伝播することとなっていった。ただし、バガンは昔も今も漆器産業の一大生産拠点で要である。

4.2 ミャンマー・バガンにおける漆器産業の現状

漆器産業の雇用、生産額、販売額、及び会社数等々について政府発表の公式統計はないが、漆器は単なる伝統工芸品ではなく、日常生活用、

² これまでにミャンマーの漆器産業について書かれた本・資料は、Fraser-Lu (1985)、Fraser-Lu (2000)、Htun (2013)、Thanegi (2013)、松島 (2008、2009)、Nyunt (2002)、JETRO (1999) 等が挙げられる。

³ インタビュー調査時の現地における観察内容も含まれる。

⁴ ヤンゴンでは漆器製造も行っている大規模な漆器屋はほとんど見出せなかった。

⁵ Htaik (2002)、Thanegi (2013) によれば、10の伝統工芸技術は、(1) 絵画、(2) 木や大理石を使用した彫刻、(3) 金や銀細工、(4) 銅、錫、黄銅の鋳物、(5) 鍛冶、(6) スタッコ浮き彫り細工、(7) 石彫刻、(8) 木工、(9) 石工 (煉瓦造りを含む)、(10) 漆器、である。

⁶ Fraser-Lu (1985、2000)。

⁷ 松島 (2008、2009)。

インテリアデザイン用、土産用、宗教関係用、農作業用と幅広い用途があり、少なくとも数百以上の店が生産に従事しているものと考えられている (Htaik 2002)。また、前述の通り、その近代のミャンマーの漆器作りを支えているのはミャンマーの中でもバガンと呼ばれるバガン王朝発祥の地である⁸。漆器生産に絞って考えてみると、バガンは3つの地域に区分される。バガン王朝の時代から存在するミンカパー村、震災後に新しく作られたニューバガンと呼ばれる地域、及び、その他の地域である。ほとんどの店は最初の2つの地域に立地している。

2013年12月末から翌年の1月にかけて行った調査によって、バガンでは少なくとも5,000人以上の人が漆関係の仕事に従事していることがわかった⁹。さらに、2014年3月に行った現地調査によると、ミャンマーの高度経済成長によって漆器に対する国内外の需要が増加したことに伴いバガン地域のみでは労働者不足が顕在化し、近郊の農村からも漆器産業に従事する若者が登場したことが明らかとなった。ただし、町の住宅不足により、漆器製作の基礎を学んだ後その職人たちは出身の村に戻る傾向にあるようである。さらに、戻った後、他の村民にその技術を伝授し、それら人々で製作をした製品を修行した元の店や他店に納入するような現象もまた起こり始めたようである。これはすなわち、

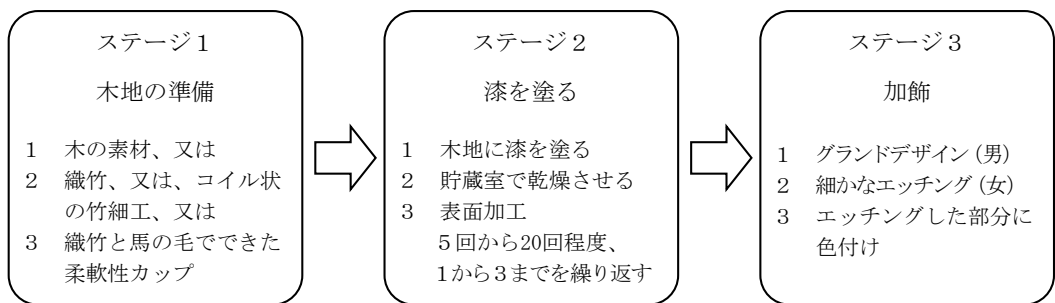
これまでバガンの町に限られていた漆器の生産がその近郊の村にまで拡大し始め、さらに、両者の分業体制が確立しつつあることを示唆している。

4.3 セクターイノベーション・システム論を通じたミャンマー漆器産業の発展メカニズムに関する分析

4.3.1 知識基盤と技術

第4図が示すように、典型的なバガンの漆器生産は主に3つの生産工程からなる¹⁰。第1の工程は、木地作りである。バガンでは通常、3つのタイプの木地が存在する。箱、盆、家具作りには木材が、この地域独特の柔軟性があるコップづくりには織竹と馬の毛が、その他の製品には通常、織竹かコイル状の竹が木地として使われる。竹細工の生産の中でも比較的容易に製作できるものは分業で下請け生産に出される傾向にあるが、非常に大型のコイル状竹細工や馬の毛と織竹を用いた漆器生産は通常大手漆器屋で行われる。

漆器第2の工程は、漆塗りである。第1の工程で出来上がった木地に漆を何回にも分けて塗っていくのである。漆は古来より世界の多くの国や地域で用いられてきた材料であるが、そ



第4図 バガン漆器生産工程

(資料) Thanegi (2013) の情報を基に、筆者作成。

⁸ 松島 (2009) によれば、現在、ミャンマーの漆器生産の90パーセント以上はバガンに集中しているとのことである。

⁹ 現在、バガンの人口は増加しているが、現地調査を行った時点 (2013年12月末) では、おおよそ、12,000人もの人がバガンの町に暮らしていると言われていた (ニューバガン地域に7,000人、ミンカパー村に4,000人から5,000人)。ミャンマーの中央統計局 (the Central Statistical Organization 2011) が提供する情報によれば、2010年から11年にかけてのミャンマー全人口に占める労働人口の割合はおおよそ60パーセントである。バガンでは、就業人口の80パーセントが漆関連の仕事に従事していると言われていた。したがって、バガンの漆器産業の就業人口は5,000人程度と推計できる。

¹⁰ 詳しくは、Thanegi (2013) を参照のこと。

の理由は防水であり、かつ、「石、コンクリート、皮、木、布、大理石、金属、ヤシの葉、紙等、土台が何であってもその上に漆を塗ることで耐久性が増し、長持ちし、かつ、どのような紋様も描けるからである」(Thanegi 2013:8)。上質の漆器は厚めに漆を数回塗るよりは、1回毎漆を薄く塗り、それを表裏合わせて20回程度繰り返して製作をされたものである。

最後に、紋様が漆器の表面に彫られ、色付けが行われる。この最後の工程は、さらに3つの細かな作業からなる。1つ目は、通常男性のチーフデザイナーが宮殿、僧院、森林等をモチーフとした大まかなデザインを描いて彫る作業である。2つ目は、それに続き、女性職人がそれにさらに細かなデザインを彫っていく作業である。3つ目は、その紋様に色付けをしていく作業である。Htun (2013)によれば、数多くいる職人の中でも第1番目の作業を行うチーフデザイナーの仕事が最も重要であり、生産に携わる職人の中でも最も高い給料が支払われるとのことである。

上記のような漆器生産プロセスはアジアの中でも極めて特徴的とされるミャンマーであるが、そもそも、そのような生産技術がどのように生まれてきたかについては、諸説ある¹¹。これまでいろいろと議論が重ねられてきたが、その生産技術がいつ、どのように生まれたのか、または、どこから伝わってきたのか、については一切、合意されていない(Fraser-Lu 1985, Nyunt 2002)。

遥か昔においてミャンマーの隣国より基本的漆器生産技術が伝わってきたことだけは明らかであるが、その後、ミャンマー独自のデザインを彫り、色付けを行っていく過程は同国独自のものであり、バガンが発祥の地と言われている(Fraser-Lu 1985, 2000)。「漆器の生産技術そのものはどこからか伝来したものであるが、バガンの職人が長い時間をかけ、非常にシンプルなデザインと色付けから進化させ、今では極めて複雑で多彩なデザインを描いた、様々な種類の漆器が生産できるようになったのである」(Thanegi 2013:14)。

4.3.2 アクターとネットワークの形成

(1) 主なアクター

漆器産業は長い時をかけて家内工業として進展をしてきた(Fraser-Lu 1985)。第1表はタイプ別に現在の主なアクターを示している。バガンで最も重要なアクターは、何代にもわたり、漆器生産に携わってきた比較的規模の大きい老舗漆器屋である。漆器のバリュー・チェーンは、製品のデザイン、製品の開発・試作、材料調達、生産、販売、マーケティングから成り立っているが、大手老舗漆器屋はこのバリュー・チェーン全体を統括する重要な役割を担っている。

しかしながら、近年のミャンマーの経済成長に伴い、従来の産業構造に変化が見られる。まず第1は、第1表から明らかなように、産業の規模そのものが拡大している。老舗漆器屋の中には正規従業員の数が減り、繁忙期のみ雇用するという方針に切り替えたところもあるが、1990年代以降現在に至るまで、多くの店では正規従業員の数を維持しているか、逆に増やしている店もある。更に、この10年から20年の間に、新たに比較的規模の大きい製造と販売機能を兼ね備えた漆器屋が誕生するに至っている。また、現在の手大漆器屋の中には、何代も漆器生産に従事しながらも、自らショールームを創設して販売するという機能を保持しなかったために、あまり、目立ってはいなかった漆器屋も存在する。しかしながら、現在はショールームを設け、バガンの地で自らの手で販売も行うようになり、バリュー・チェーン全体の統括者としても存在感を示す大手漆器屋として脚光を浴びるようになった店も存在する。

(2) ネットワーク

過去10年間の間に主に大手漆器屋の間で漆器産業を代表する業界団体が結成され、フォーマルなネットワークが形成されるに至った。2013年の3月から2014年3月の間に3回行われた調査で、少なくとも漆器工業組合の2つの役割が確認された。1つ目は漆器屋が抱える共

¹¹ Nyunt (2002) を参照。

第1表 タイプ別イノベーションアクター

大手漆器屋 (製造販売店)				
	場所	雇用者数		留意点
		1990年代後半	2013	
(1) 1990年代からすでにその存在が広く知られた老舗				
Royal Golden Tortoise	ニューバガン	80	25	
U Ba Nyein	ニューバガン	40	60	
Tun Handicraft	ニューバガン	40	50	
Sin Phyu Taw	ニューバガン	40	120	2013年は、一時的に政府プロジェクトに従事
Golden Bagan	ニューバガン	15	10 + 臨時工	創業者は元漆芸技術学校の校長
Art Gallery of Bagan	ミンカパー	30	46 から 56	
Golden Cuckoo	ミンカパー	35	20 + 臨時工	
Shwe La Young	ミンカパー	25	20	
Chan Thar	ミンカパー	25	20	
(2) 21世紀に入って、頭角をあらわした漆器製造販売店				
Bagan House	ニューバガン	不明	100	創業者は元漆芸技術学校教員
Myat Mon	ニューバガン	不明	10 + 臨時工	海外からの受託中心。今後は観光客も視野に入れる
The Lotus Collection	ニューバガン	存在なし	32 から 36	
Mya Thit Sar	ミンカパー	25	34	70人まで雇用を拡大予定
Family	ミンカパー	不明	38	
Diamond Arrow	ミンカパー	存在なし	23	主にOEM生産だが、オリジナルデザイン製品も販売開始
King of Golden Elephant	ミンカパー	不明	14	OEM生産からオリジナル製品販売へシフト
Myo Myo	ミンカパー	不明	21	骨董品と新製品の販売の両方
Win Thiri	ミンカパー	不明	10	骨董品と新製品の販売の両方
Ever Stand	ウエチン	5 (1992年)	50	1992年、5人の家族経営ビジネスからスタート
下請け専門漆器屋				
(1) バガンの大手漆器屋に製品を納入				
(2) ヤンゴンやマンダレーといった、大手卸売、又は、小売り店に販売				
家族経営漆器屋				
(1) 家族のみで経営をしており、自らのショールームをもたず、主に観光地横で製品を販売。				
ある特定の生産工程に参加している漆器屋				
(1) 木製素材の木地屋	店舗数は不明			
(2) 竹製素材の木地屋	ミンカパーで10件。ニューバガンで7件。			
(3) 漆塗り	以前は10件。しかし、2011年以降、新規参入者が相次ぐ。			
(4) デザイナー	バガンでは独立して有名なデザイナーは数少ない。			

(資料) JETRO (1999)、及び、2013年3月から2014年3月の間に3回行われた現地調査に基づく。

通の問題・課題を見出し、その解決策を模索することである。直近では、シャン州で採れる漆の原料の値段が高騰をし始め、それに対する対策を講じることであった。2つ目は、協同組合省家内工業局の管轄下にある政府漆器技術学校を通して、漆器産業の民間セクター（漆器屋）の意見をまとめて、政府に陳情する役目である。

しかしながら、長い漆器産業の歴史と比較するとつい最近成立したばかりの漆器業界団体内のネットワークは弱く、あまり問題・課題の解決には役立つてはいないようである¹²。それよ

りも、漆器屋同士のインフォーマルなネットワークの方が実質的な意味ではより機能していると考えられる。1つ目のインフォーマルなネットワークは、バリュー・チェーンの統括者として重要な役割を担っている大手漆器屋と、規模が小さく下請け的な役割を担っている小規模な漆器屋との関係である。国内外の漆器への需要が高まる中、大手漆器屋はもはやすべての生産を自前で行わずより付加価値の高い製品に特化し、かつ、生産工程の中でも技術がスタンダード化している工程に関しては外注する方針

¹² 3回の現地調査の中で、フォーマルなネットワークの弱さは多くの漆器屋で指摘されたことである。

に切り替えられた。これら両者の関係は柔軟性に富み、かつ、家族間のインフォーマルな繋がりで成り立っていることが多い。

もう1つのインフォーマルな関係は労使関係にも見られる。前述のように、バガンの漆器生産技術は何百年にもわたり代々、受け継がれてきたものであり(Thanegi 2013)、バガンの子供たちは幼少期から学校が休みの間家で、又は、近くの漆器屋で漆器作りを学ぶのである。とりわけ初心者はその家族でなくても、大手漆器屋で授業料を支払うことなくその技術を学べるのである。それら大手漆器屋も決して損をすることはない。技術を授けた若者がその後一旦職場を離れても、大手漆器屋の生産が間に合わない場合は呼び戻されてその生産に従事することが容易になるからである。

漆器作りには信頼関係と誠実さが何よりも大切である。一旦漆を塗って紋様をつけてしまえば、素人の消費者がその品質を見分けることは至難の業だからである。Putman (1992) は北イタリアでは、ソーシャル・キャピタルの中で最も重要な要件、つまり、相互の信頼関係が同地域の産業ダイナミズムを支えている最も重要な気風であることを見出した。バガンの漆器作りにも同じことが言える。相互信頼関係によって形成されているインフォーマル・ネットワーク関係こそ(まさにこれこそがソーシャル・キャピタルを形成するものであるが)、バガンの漆器産業のイノベーション・プロセスを根幹で支えているものといえよう。

4.3.3 制度構築

バガンでの漆器生産に関する技術やノウハウは、それぞれの漆器屋で代々、学習、経験を通して新しく見出されたか、又は、徐々に改善されてきた知識の塊であり、まさにそれこそ、バガンの漆器産業のイノベーションの源泉である。しかし、それだけでは、ミャンマーの中で

バガンに漆器産業が集積し、かつ、近年、益々その傾向にあることは説明できない。Fraser-Lu (1985, 2000) は、バガンの地において政府系の漆芸技術学校が設立されたことがそれに大きく関係するとしている。ミャンマー漆芸技術学校は、1924年、当時、他国から非常に安くミャンマーに輸入され社会に浸透した陶器や金属製の器に対抗するため、設立されたものである。その後、同学校は、漆器作りのための実地訓練と生産に必要な知識やノウハウを学生に授け、ここから非常に優秀な卒業生が何人も輩出されることになった¹³。

また、本漆芸技術学校は、2つの意味で、バガンと海外とのゲートキーパーとしての役割を担ってきた。1つは、国費留学生がミャンマー政府によって海外に派遣され、その国で新しい漆芸技術を学んだ後、同学校の教師となって戻り、他の学生に広く新しい知識や技術を伝える役割を果たした¹⁴。例えば、Tin Aye氏は日本に派遣されて漆芸技術を学び、後に同学校の校長となり、日本の技術やノウハウを多くの学生に伝授をした¹⁵。また、Golden Baganという漆器屋を創業し、漆器ビジネスを通して、多くの従業員に漆器製作のノウハウを伝授した。

もう一つは、公式、非公式に外国の専門家を漆芸技術学校に招聘し、ミャンマーの人々に広く漆に関する新しい知識や技術を伝授する場を設ける役割である。直近の例では、外国の専門家が同学校を訪問し、正式に輸出をしても問題がないような、顔料の生産技術を伝授した¹⁶。ミャンマーが古来から使用している顔料には日本やヨーロッパでは使用できない化学物質が含まれていることがわかり、ミャンマー製品の中には海外に輸出できない漆器も存在することが明らかとなった。漆器屋の中には、それら日本の顔料を使用して製品作りに乗り出しているところもある。

¹³ 2013年3月から2014年3月の間に行った3回の調査によって、現在、入学してくる学生の多くは漆器作りそのものには興味がなく、ほとんどの学生は2年間、漆器作りの理論を学んだ後、他大学に入学をしてビジネスや経済学を学ぶとのことである。したがって、現在、漆器屋のほとんどは同学校を卒業した学生を採用することはない。それよりは、漆器屋自ら漆器作りの訓練を提供しているとのことである。

¹⁴ ただし、現在、かつてのような学校の機能は存在していないようである。バガンにおいて漆器づくりに携わっている人々はその学校の教員が海外に派遣されたとしても、その知識やノウハウがあまり産業界に還元されていないことに不満を持つ傾向にある。

¹⁵ 例えば、大理石模様様の漆器、蒔絵、白色の顔料の使用である (Fraser-Lu 2000)。

¹⁶ 松島さくら子教授が開催したセミナーでは漆関係の様々な専門家が招聘されたが、そのセミナーを通して、様々な漆関連の知識が伝授されている。

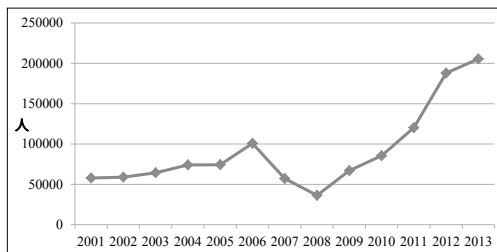
4.3.4 需要の役割

イノベーション・システム論はイノベーション・プロセスの中で需要側の役割も重要視をする。それは、製品やサービスの消費者(ユーザー)は、イノベーションにつながるヒントを提供することが多々あるからである。一般論では、国内外に限らず、消費者(ユーザー)の役割が期待できるが、バガンの漆器産業の場合は外国からの需要増がイノベーション・プロセスに大きく貢献したことが明らかとなった。

1962年以來26年間、ミャンマーは社会主義政権下で保護主義的政策が採られ続け、外国との接点はほとんどなかった。1990年代以降ようやくその政策が転換し、グローバル経済への統合が指向され始めた。とりわけ、1990年代初頭以降の、観光を経済活性化の1つの起爆剤とする政策は、バガンの漆器産業の発展に大きく貢献することとなった。

第5図は2001年以降、バガンを訪問した外国人観光客数の推移を表したものである。1990年までミャンマーを訪問したことがある人の数は極めて限られていた¹⁷。しかし2001年までには、おおよそ5万人の外国人観光客がバガンを訪れるようになった。この数はばかにならないものである。というのも、バガンの町の人口のおおよそ4倍もの数にあたるからである。また、同図によれば、2011年民政移管を達成し、グローバル経済への統合化が本格的に開始されると、外国人訪問客が激増していることもわかる。現在ではなんとバガンの町の人口の10倍もの観光客が毎年バガンの地を観光客として訪れるようになったのである。

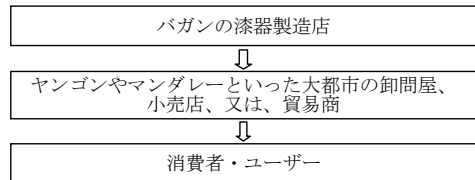
観光振興はバガンの漆器産業に大きな変化を



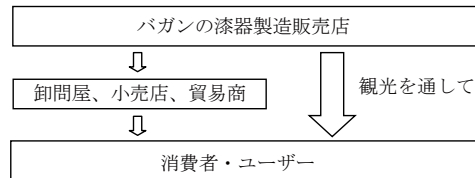
第5図 バガンを訪れる観光客数の変化(年度レベル)
(資料) バガンで入手した統計に基づいて筆者作成。

もたらすことになった。第6図が示すように、それまで漆器の販売は、国内大消費地に立地する卸問屋や小売商、または、ヤンゴンに立地する貿易商を通して行われ、漆器の生産者はあまりユーザーと直接接する機会はなかった。しかし、観光が振興されるようになると、バガンの漆器生産者は中間業者を介さず直接、ユーザーと取引を行えるようになり、これがバガン漆器生産者のイノベーション・プロセスに大きな影響を与えることになった。正式な輸出促進のためにはインフラ整備やら数々の手続きを経なくてはならず、きわめて、煩雑であり、ハード・ソフト両面で最貧国であるミャンマーのような途上国にはハードルが高い。観光はまさにそういった要件が満たされない国でも途上国の生産者と海外のユーザーを直接結びつける、極めて有効な手段と考えられる。

(a)観光が導入される前



(b)観光導入後(とりわけ、2011年3月以降)



第6図 観光振興に伴った販売網の変化

(資料) 筆者作成。

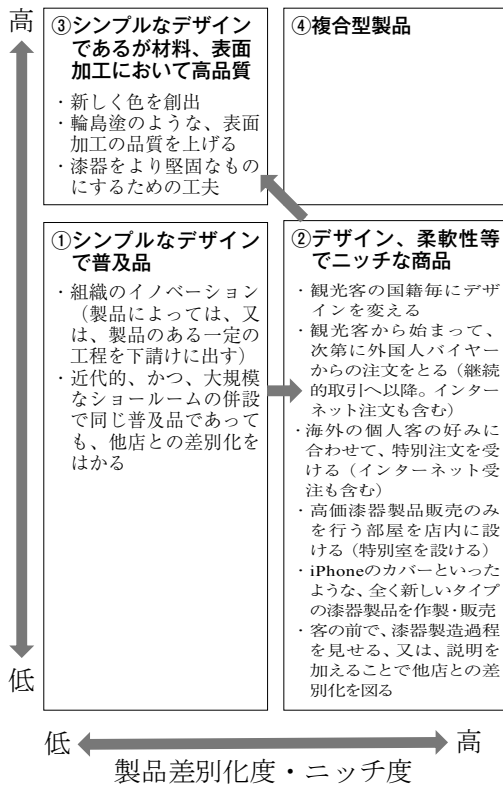
第7図は、第1表で示した比較的規模が大きい漆器屋を中心に、観光振興によってもたらされたイノベーションの数々を要約したものである。まず第一のイノベーションは、組織的イノベーションである(第7図カテゴリー①を参照)。先に述べたように観光客の急増で、バガンの漆器に対する需要が急速に増えた。この結果、特にブランド力が高い大手漆器屋は自社では付加価値の高い製品、または、付加価値の高い製造工程に特化し、その他は、従来から関係

¹⁷ ミャンマー中央統計局 (the Central Statistical Organization2011) 発表の統計資料による。

性があるような漆器屋、または、家族経営の漆器屋に下請けに出すようになった。もちろん、下請生産された漆器も発注した漆器屋の品質チェックを受けており、かつ、発注側のブランドで販売されている。短期間のうちに、言わば、OEM生産（相手先ブランド名生産）のようなものがバガンの漆器産業で構築されたのである。このような分業体制の構築によって、普及品のコストをある程度低く抑えることに成功したのである。

第2のイノベーションは、漆器ユーザーの嗜好に合わせた製品差別化である（第7図のカテゴリー②）。第8図が示すように、バガンを訪問する観光客の国籍はアメリカ、ヨーロッパ、アジアと多岐にわたる。したがって、大手漆器屋も、好みが異なるユーザーに合わせて製品の種類、サイズ、色、形状、デザインを変え

品質の度合い



第7図 観光振興を契機としてバガン漆器産業に創出されたイノベーションの数々

（資料）インタビュー調査に基づいて、筆者作成。

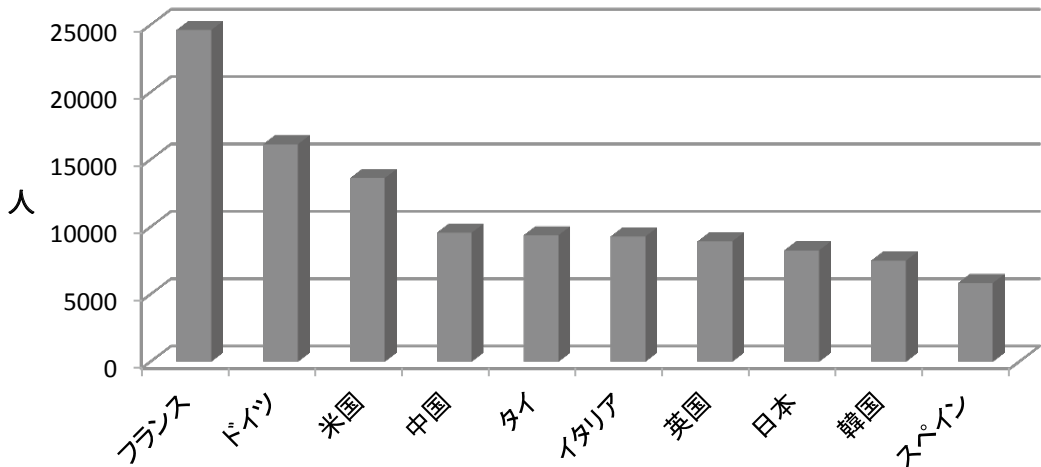
るようになっていった。海外からの観光客の増加によって、海外のユーザーに関する貴重なマーケット情報が直接得られるようになったのである。この結果、特に大手漆器屋は漆器のバリエーション全体を統括できるようになったのである。例えば、2013年ぐらいから多くの観光客が保持するiPhoneのカバーも漆器製品として新しく市場に投入された。これは今までにない、全く新しいコンセプトに基づいた製品である。

また、大手漆器屋の中には、観光から始めて、海外のバイヤーと長期の取引関係を樹立することに成功した店も存在する。海外のバイヤーが一度、観光ビザでバガンの店を訪れ、品質を含めて製品を吟味し、信頼関係が両者の間で一度樹立された後は、インターネットでの発注、受注が繰り返されるようである。その段階まで達すると、海外のバイヤーは通常のルートでの輸出等に関する情報もまた大手漆器屋に提供できるのである。

さらに、大手漆器屋の中には、インターネットで海外から個人の注文を受け付ける事を始めた店もある。外国人がまずは観光客としてバガンを訪れ、それ以降は、それぞれの個人の好みに合わせて注文を取り、郵送するのである。情報や金融インフラの発達によって世界でニッチな市場を開拓して販売を広げる可能性がより一層広がったといえる。

第3のイノベーションは、プロセス・イノベーションである（第7図のカテゴリー③）。典型的な例は、新しい色彩を可能とする材料の開発である。大手漆器屋の中でも急速に拡大している漆器屋の1つは、これまでバガンに全く見られなかった白色系の色の開発に成功をし、製品を投入した。その色を適用した漆器が爆発的に売れ、その流れに追随する店も現れ始めた。また、少なくとも3つの大手漆器屋でのインタビューで明らかとなったことであるが、近年、デザインは簡単であるが日本の輪島塗のような、非常に高品質な表面加工が施された漆器の開発に乗り出した店が登場してきた。これは、日本、フランス、イタリア、ドイツといった国からの観光客の好みを取り入れたものであることである。

要約すると、第7図が示すように、観光産業の導入とブームとともに漆器産業で様々なイノ



第8図 平成24年度におけるバガンの国籍別観光客数（トップ10）

（資料）バガンで入手をした統計資料に基づいて筆者作成

ベーションが創出され、ステージ1からステージ3まで、徐々に製品の差別化と品質の高度化が進展していった。これは、1980から90年代以降、東南アジア諸国に典型的に見られた輸出先導型成長と同様な現象である。ただし、ミャンマーのバガンとの違いは、どのように海外需要が掘り起こされたかということである。バガンの場合は、通常の輸出というよりは、外国人観光客を通して、間接的に外国の漆器に対する需要が掘り起こされ、それが、バガンの漆器産業の興隆と発展に繋がったのである。

5. 結果とまとめ

本論文の目的は、ミャンマーのバガンというような、最貧国の中でも貧しい中央乾燥帯に立地する地域が、伝統的かつ‘ローテク’産業振興によって発展が遂げられるかどうか、実証的に明らかにすることであった。特に、セクターイノベーション・システム論を用いながら、バガンに古くから存在する伝統的かつ‘ローテク’産業の漆器産業に焦点を当てて、実証的考察を加えた。2013年3月から2014年初頭まで、3回の現地調査を行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。まず第1に、ミャンマーの古都バガンは古よりも漆器の町として有名であったが、1990年代に観光が導入され、かつ、2011年から観光振興が加速化されてからようやく漆器産業が本格的

に興隆し、地域も活気づいた。

第2に、観光振興は、組織の変革、製品の差別化、品質の高度化といったような、様々なイノベーションを引き起こし、漆器産業、ひいては、地場産業に大きく貢献をしたことである。それは、漆器生産者が観光を介して外国人ユーザーと直接取引ができることで、製品のデザイン、開発、材料調達、製造から、販売、マーケティングまで、バリュー・チェーン全体を掌握できるようになったからである。言い換えれば、自らイノベーションを主導できるようになったのである。このケースは、(海外)需要がイノベーション・プロセスに非常に大きな影響をもたらすことを示唆している。

第3に、漆器産業のような‘ローテク’産業であっても、組織のイノベーション、ニッチ市場の開拓、品質の高度化等によって、非常に革新的に成りえることである。最先端の科学技術を取り入れることだけがイノベーションの源泉ではない。

最後に、セクターイノベーション・システム論は、途上国の産業のダイナミックな進化の過程を分析する際にも1つの有益なアプローチと成り得ることが明らかとなった。また、それは、グローバル化の時代にあった、新しい産業政策の在り方についても示唆を与えてくれるものと言えよう。本事例研究で明らかになったように、1つの学校という制度の構築が、技術訓練、海外からの新しい知見の導入と普及を通じて、漆器産業の土台作りにも極めて大きな役割を果たし

得るのである。保護や補助金ばかりが産業政策手段ではない。知識経済下にあつては、新しい知識の創造、又は、外部からの知識の導入、適応、普及ということが行いやすい環境を整備することが極めて重要な産業政策と成り得ることが本研究を通じて明らかとなった。

参考文献

(日本語文献)

- ・JETRO (1999) 「ミャンマーの漆器」 日本貿易振興会海外経済情報センター。
- ・松島さくら子 (2008) 「ミャンマーにおける漆工芸を通じた工芸教育交流—ミャンマー伝統工芸学術支援事業の活動現場から—」 『宇都宮大学教育学部紀要』 第1部 58、181-191 ページ。
- ・松島さくら子 (2009) 「漆が語るアジアの文化」 『宇都宮大学教育学部紀要』 第1部 59、63-75 ページ。

(英語文献)

- Archibugi, D., Howells, J. and Michie, J. (1999) 'Innovation Systems in a Global Economy', *Technology Analysis & Strategic Management*, Vol.11 No. 4, pp. 527-539.
- Asian Development Bank (2013) *A Key Indicator for Asia and the Pacific 2013*, at WWW.ADB.ORG. 最終アクセス日は平成26年3月31日。
- Asian Development Bank (2014) *Asian Development Outlook 2014*, at WWW.ADB.ORG. 最終アクセス日は平成26年4月10日。
- Carlsson, B. (2006) 'Internationalization of Innovation Systems: A Survey of the Literature', *Research Policy*, Vol.35 No.1, pp. 56-67.
- Central Statistical Organization (of Myanmar) (2011) *Myanmar Data CD-ROM 2011*, Central Statistical Organization, Nay Pyi Taw.
- Chaminade, C., Lundvall, B.-A., Vang, J. and Joseph, K.J. (2009) 'Designing innovation policies for development: towards a systemic experimentation-based approach', in Lundvall, B.-A., Joseph, K.J., Chaminade, C. and Vang, J. (Eds): *Handbook of Innovation Systems and Developing Countries*, Edward Elgar, Cheltenham, UK, pp.360-379.

Cimoli, M., Dosi, G. and Stiglitz, J.E. (2009) 'The Political Economy of Capabilities Accumulation: The Past and Future of Policies for Industrial Development', in Cimoli, M., Dosi, G. and Stiglitz, J.E. (Eds): *Industrial Policy and Development: The Political Economy of Capabilities Accumulation*, Oxford University Press, Oxford, pp. 1-16.

Edquist, C. (2005) 'Systems of Innovation: Perspectives and Challenges', in Fagerberg, J., Mowery, D.C. and Nelson, R.R. (Eds): *The Oxford Handbook of Innovation*, Oxford University Press, Oxford, pp. 181-208.

Fraser-Lu, S. (1985) *Burmese Lacquerware*, The Tamarind Press, Bangkok.

Fraser-Lu, S. (2000) *Burmese Lacquerware*, The Orchid Press, Bangkok.

Hirsch-Kreinsen, H. (2008) ' " Low-Technology" : A Forgotten Sector in Innovation Policy', *Journal of Technology Management & Innovation*, Vol. 3 Issue 3, pp. 11-20.

Htaik, T. (2002) 'Myanmar traditional lacquerware techniques', in Kopplin, M. (Ed.): *Lacquerware in Asia, today and yesterday*, UNESCO, Paris, pp. 183-185.

Htun, Than (2013) *Lacquerware Journeys: The Untold Story of Burmese Lacquer*, River Books Co., Bangkok.

Iizuka, M. (2009) " Low-tech' industry: a new path for development? The case of the salmon farming industry in Chile', in Malerba, F. and Mani, S. (Eds): *Sectoral Systems of Innovation and Production in Developing Countries*, Edward Elgar, Cheltenham, U.K., pp.232-258.

Kopplin, M. (2002) 'Lacquerware in Asia: past and present', in Kopplin, M. (Ed.): *Lacquerware in Asia, today and yesterday*, UNESCO, Paris, pp.19-21.

Lundvall, B.-A.; Vang, J.; Joseph, K.J.; Chaminade, C. (2009), 'Innovation system research and developing countries', in Lundvall, B.-A., Joseph, K.J., Chaminade, C. and Vang, J. (Eds): *Handbook of Innovation Systems and Developing Countries*, Edward Elgar, Cheltenham, UK, pp.1-30.

Maddison, A. (2008) 'Shares of the Rich and the Rest in the World

- Economy: Income Divergence Between Nations, 1820-2030’ , *Asian Economic Policy Review*, Vol.3 Issue 1, pp. 67-82.
- Malerba, F. (2002) ‘Sectoral systems of innovation and production’ , *Research Policy*, Vol. 31 Issue 2 , pp.247-264.
- Malerba, F. , ed. (2004) *Sectoral Systems of Innovation: Concepts, Issues and Analyses of Six Major Sectors in Europe*. Cambridge, University Press, Cambridge.
- Malerba, F. (2005) ‘Sectoral Systems: How and Why Innovation Differs across Sectors’ , in Fagerberg, J., Mowery, D.C. and Nelson, R.R. (Eds) : *The Oxford Handbook of Innovation*, Oxford University Press, Oxford, pp. 380-406.
- Malerba, F. and Mani, S. (2009) *Sectoral Systems of Innovation and Production in Developing Countries: Actors, Structure and Evolution*. Edward Elgar, Cheltenham.
- Malerba, F. and Nelson, R. (2011) ‘Learning and catching up in different sectoral systems: evidence from six industries’ , *Industrial and Corporate Change*, Vol. 20 No. 6 , pp.1645-1675.
- Mendonça, S. (2009) ‘Brave old world: Accounting for ‘high-tech’ knowledge in ‘low-tech’ industries’ , *Research Policy*, Vol. 38 Issue 3, pp. 470-482.
- Nyunt, K. M. (2002) ‘Myanmar lacquerware: Historical background and cultural perspectives’ , in Kopplin, M. (Ed.) : *Lacquerware in Asia, today and yesterday*, UNESCO, Paris, pp.173-181.
- Pérez, C. (2006) “Re-specialisation and the Development of the ICT Paradigm – An Essay on the Present challenges of globalization” , in Compañó, R., Pascu, C., Bianchi, A., Burgelman, J-C., Barrios, S., Ulbrich, M. and Maghiros, I. (Eds) : *The Future of the Information Society in Europe: Contributions to the Debate*, European Commission, Brussels, pp.33-66.
- Putman, R. D. (1992) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, New Jersey.
- Sen, A. (1999) *Development as Freedom*, Oxford University Press, Oxford.
- Soete, L., Verspagen, B. and Weel, B.T. (2009) ‘Systems of Innovation’ , UNU-MERIT Working Paper Series #2009-062.
- Thanegi, M. (2013) *Bagan Lacquerware*, Asia House, Yangon.
- Tunzelmann, N.V., and Acha, V. (2005) ‘Innovation in “Low-Tech” Industries’ , in Fagerberg, J., Mowery, D.C. and Nelson, R.R. (Eds) : *The Oxford Handbook of Innovation*, Oxford University Press, Oxford, pp.407-432.

